資料　11-1

中学生の声をまちづくりに

～藤沢町住民自治協議会「次世代プロジェクト事業」を通して～

一関市立藤沢中学校　校長　鈴木 秀行

1　はじめに

県内の小中学校では、「いわて型コミュニティ・スクール構想」のもと、学校・家庭・地域が連携、協働する教育が推進されています。また、校長としても、教育を学校という枠に囲い込むのではなく、地域の資源や教育力を活用して、生徒の健全育成を図っていくことが大切であると考えていたところでした。

平成27年12月に藤沢町住民自治協議会（以下、住民自治協）が、藤沢市民センターの指定管理者の指定を受け（市内第1号）、地域住民一体となった、より身近な地域づくり、人づくりの中心となって活動を組織していくことになりました。そのような折、住民自治協の星義弘事務局長が来校され、「これからの町づくりを考えていくときに、次代を担う中学生の柔らかな発想に期待するところが大きい。」とのお話を受け、まずは要請のあった住民自治協の愛称とシンボルマークのデザイン、地域を元気にするアイデアの募集に全校で参加することとしました。

さらに、平成28年度には、星事務局長より市補助「次世代育成事業」を活用した「次世代プロジェクト事業」への参加を打診され、職員会議で校長として協力に応じたい旨を提案し、職員はノータッチ、窓口は校長での活動として了承され、「次世代プロジェクト事業」への参加となりました。

4、校長私見「協力したい！」　　＜職員会議資料（一部抜粋）から＞

○一関市で最も早く、市民センターの指定管理者になった藤沢町住民自治協議会の活動を後押ししたい。（まちぐるみでの取り組みに広げたい。）

○「地域を支え、地域に支えられる学校」の実現

○生徒の教育は、学校に囲い込んで教師のみが行うものではない。
「教師でもない、家族でもない」大人の教育力により子どもを成長させたい。

○これからの地域の担い手としての自覚を促し、将来の地域づくりの疑似体験をさせたい。

○藤中生の活躍の場、元気の発信

2　実践の流れ

（1）平成27年度（3学期）

・住民自治協の「愛称」と「シンボルマークのデザイン」、「地域を元気にするアイデア」への応募

（2）平成28年度　　「次世代プロジェクト事業」への参加

ア　「地域を元気にするアイデア」の全校アンケートの実施、メンバー募集

イ　「まちづくりのアイデア」ワークショップの開催

ウ　「指定管理記念講演会」での発表

エ　アイデアを具現化する活動（「地元食材を使ったパン」の製作）

オ　「地域フォーラム」会場でのパンの販売活動

カ　活動のまとめ

←住民自治協のロゴとキャッチコピー

3　具体的な取り組み

（1）住民自治協の「愛称」と「シンボルマークのデザイン」、「地域を元気にするアイデア」への応募

【シンボルマーク】　優秀賞1名、入選3名

【愛称】　最優秀賞　2年男子「どんとこい藤沢」　　優秀賞1名、入選2名

＜審査員評＞「地域づくりへの強い期待と思い、そして、何事にも前向きにとらえ進んでいくことと併せ藤沢に『どんと』人が来るようにとの発信性がある」

【地域を元気にするアイデア】　校内で集約したもの

（2）「次世代プロジェクト事業」始動

ア　「地域を元気にするアイデア」の全校アンケート（パート2）の実施、メンバー募集

○３年生５人が応募、その後、３年生、２年生が１人ずつ参加

イ　「まちづくりのアイデア」ワークショップの開催

○中総体後から、放課後に、学校で

○支援する人・・・協議会スタッフ、NPO一関市民活動センター「地域支援員」

○中総体後の６月に２回開催

ウ　「指定管理記念講演会」発表スライドの作成　　・放課後（ＰＣ室）、自主的に

（3）「指定管理記念講演会」での発表　＜H28/7/9(土)＞

○講師；増田寛也氏（前岩手県知事、元総務大臣）の前座を務める。→　勝部修市長に

○ワークショップで話し合った内容をプレゼン。15分程度

・千田会長から「胸を熱くして聴かせてもらった。大人の停滞を中学生の発想で打破していきたい。今日の発表は住民による地域づくりの第１ステップだ。『夢の実現』『誇れる藤沢をつくること』を心に誓った。」と講評がありました。

（4）アイデアを具現化する活動（「地元食材を使ったパン」の製作）

○住民自治協「お金も、モノも、手も貸します」

○アイデアの中から「地元食材を使ったパン」を選定

○町内の「パンのいとう屋」さんの協力のもと、藤沢の地元産品「リンゴ」等を使用したオリジナルパンを考案、製作

・「りんごだっちゃ」、「もっちりふすべパン」の２種類

（文化祭後；10月～12月にかけて３回）

▲「パンのいとう屋」さんご夫妻と相談する次世代ＰＲ７メンバー

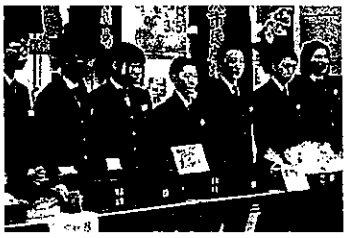
（5）「地域づくりフォーラム」会場でのパンの販売

ア　販売に向けたＰＲ活動（ビラ、ポスター、手紙・ラジオ、告知端末）

イ　2/5(日)、パン販売（縄文ホール；フォーラム終了後）

・製作したパンは、250個限定で販売。10分で完売。

ウ　収益金　　・「ＰＲ７」の名入りスリッパ30足を学校に寄贈



←販売開始直前どきどきのメンバー達

（6）全校生徒への活動報告会　3/14(月)

○「全校生徒に活動の報告をしていない。やりたい。時間をくれ。次の世代に繋ぎたい。」

○メンバー達は、受験後の数日で、あっという間にプレゼン資料を作成し、全校生徒に報告。

（7）「一関の未来予想図トークショー」へ藤沢町代表として出演依頼　11/26(土)（Ｕドーム；２名）

4、「次世代プロジェクト」参加生徒への事後のアンケート結果（Ｎ＝６人、ABCDEFで表示）

（1）活動に参加してよかったですか。　　「とてもよかった」　６人

（2）それはどうしてですか。

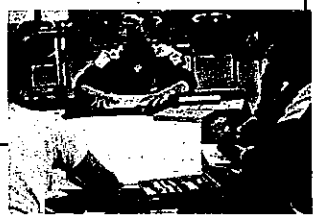
ABE 活動を通して、地域の、町のよいところをたくさん知ることができた。

CD 自分達で地域に貢献することができた。

F 自分たちが考えたパンを売った時にお客さんが喜んで買ってくれうれしかったし、中学生が地域のために頑張っているということが少しでも伝えられた。

A 悪いところを改善する働きができたから

B パンを考えたりするのがとても楽しかったから



←笑顔が広がるワークショップ

（3）活動時期、活動時間はどうでしたか。

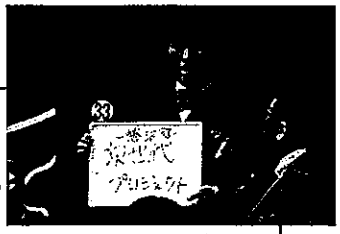
ア　活動時期（6月；ワークショップ、7月；プレゼン発表、１１月～；オリジナルパン考案・販売、3月;報告会）

C ちょうどよかった。
A もう少し時間がほしかった。
B 部活動もあってなかなか参加できなかった。
D 中総体の関係で6月は少しずらした方がいい。5月の始めがいいと思う。
E 6，7月は中総体の関係で参加できない人がいたから忙しくない時に行った方がよい。
F 僕は途中からでしたが、パン考案から販売に向けて考えることができた。

イ　活動時間（活動時間がとれる日の放課後）

ABCDE ちょうどよかった。（前もって日程をしっかり確認した方がよい、集まれる人から集まって話し合いを進めた、それ以外は取れない）
F リーダーを中心に今日のゴールを決め、時間を有効に使って大体6時前後まで活動できた。

（4）今年度の活動内容について、感想や意見をお願いします。



△「藤沢町の誇れるものは次世代プロジェクトです！」

AB 地域についてたくさん知ることができててよかった。
A 授業で習ったことを使うので楽しかった。
C 地域を活性化して一緒に仲間と活動することでいい思い出になった。
B 自分の要望が実現するのが嬉しかった。
D 活動がとても充実していたと思う。自分たちの出した意見が実際に活動になった時が一番楽しかった。もっとこのような活動が増えるとよい。
E 2年生のメンバーが少ない。次世代なので多くの学年に参加してほしかった。地元のパン屋とコラボし自分たちで考えたことが実現できて嬉しかった。
F 6月から活動が始まりワークショップ、プレゼン、パン考案・販売、報告会をしました。3年生とパンを考え販売当日にはわずか10分で完売させることができ、嬉しかったです。

（5）「次世代プロジェクト」の活動のよさは何でしたか。

A 意見を出し合ってより良いものをつくり上げること
B 藤沢のよいところを知ることができたこと
C みんなでないとできないことができる点
D ワークショップで出し合ったことを実際に自分たちで活動できるところ
E 自分たちで考えたことが実現できたこと、住民自治協議会の方々がとても協力的だったこと
F 地域の方々に中学生の頑張りを伝えることができたこと

（6）活動を通してあなたにどのような資質、能力が身に付いた（育まれた）と思いますか。

A 先を見通してまとめる力　B 人を思いやる力　C 創造する力
D 他人のことを考えて行動すること。地域に貢献しようとする意欲が育まれた。
E 買ってもらうためにどのような生地や具が必要か、パンの値段をいくらにするかを考えたこと
E 将来のことを見据えて活動していく力　F みんなと協力して一つのものを創り上げる力

（7）藤沢町住民自治協議会の支援体制はどうでしたか。

A よかった。自分たちが言ったことをしっかりフォローして下さった。
B とてもよかった。自分達がやりたいと言ったことを叶えてくれて私達のために走り回ってくれた。　C 最高だった何でもしてくれてよかった。
D とてもよかったと思う。自治会のお陰でスムーズに進めることができた。
E とても協力的だった。言った意見をすべて受け入れてくれた。
F 中学生が参加できる場を提供してくださった。パンの宣伝などでラジオでの放送も手伝ってくださった。

（8）町づくりに中学生の声は必要ですか。また、その声は生かされると思いますか。

ABCD 必要であるし、生かされると思う。
E もちろん。パン販売の時多くの人が買いに来てくれたから。７月の発表も多くの人に聞いてもらえたから。
F 次の世代を担う子供の声を積極的に取り入れることはこれからの町づくりに必要だと思います。

（9）次年度以降の活動について、自由に意見をお願いします。

A ネットを使った活動、発信　　B 人をもっと増やして小学生の意見をとってほしい。
C もっと藤沢を盛り上げてほしい。
D 来年度はもっとこのプロジェクトに参加してほしい。
E 今年度出した改善点に関する活動を行ってほしい。次の２年生からも３人ほどは活動に参加してほしい。
F 野焼きの改善や館ヶ森ウィンナーを使ったギネス記録など新しいメンバーと考えていきたいです。

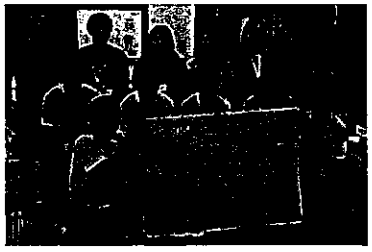
5、平成 29 年度「次世代プロジェクト 2017」

（1）「『藤沢町のお宝』発見＆発掘!!」の全校アンケートの実施、第２期メンバー募集
　３年生６人・２年生１人が希望（チーム名「プロジェクト７」）

（2）岩手県立大学（佐藤哲郎研究室）とコラボした「まちづくりのアイデア」ワークショップの開催
　（中総体後；６月から 12 月にかけて５回）

（3）アイデアを具現化する活動（地元産品のリンゴを使った「アップルパイ料理教室」の開催）
　○自分達で試作会 12 月　　○ＰＲ（チラシ、告知端末）
　○本番 1/13（土）（町民 17 名参加）

（4）「地域づくりフォーラム」での実践発表　　2/4（日）予定



←県立大学生とコラボのワークショップ

6、成果と課題

（1）成果

ア　中学生の秘めたる力を実感
・場を与えると発想が広がり、大人の支援の下で実際に形にしていくストーリーを目の前で見ることができた。中学生恐るべし。

イ　「現実の問題集」を解く時間
・「どうやってＰＲするの？」「クルミにアレルギー反応を示す人もいるけど」「値付け」等々

ウ　信頼できる大人たちが地域にいることを実感
・自分達を見守り、声をかけ、励まし、助言してくれ、お金もある程度出してくれる大人が地域にいっぱいいる。

エ　企画を現実化できる手応え
・生徒の事後アンケートにもあるように生徒自身が手応えを感じている。

オ　「社会人としての基礎となる力」は自然と育まれる
・活動する中で様々な力が身に付き、見方・考え方が豊かになり、意欲、自信に繋がった。

（2）課題

ア　活動時間の確保
・中学生は部活動、行事、テストで忙しい。時間を見つけてやるのが活動のポイント。

イ　住民自治協と学校との連携の在り方
・意見交換しながら継続可能な活動の在り方を共に探っていくこと。

資料　11-2

きたかみ地域教育力向上フォーラム開催報告

子どもたちがこれからの社会をたくましく生きる力を育むには、家庭・学校・地域・行政が子どもたちの学びにどのように関わり「地域教育力」を高めていけばよいかを考えるため１月30日(土)、日本現代詩歌文学館講堂において、平成27年度「きたかみ地域教育力向上フォーラム」を開催しました。

プログラム

■日時：平成28年１月30日（土）午後１時30分～３時30分
■会場：日本現代詩歌文学館講堂

■当日のプログラム

開会・北上っ子５つのやくそく唱和

事例発表（教育振興運動地域課題支援事業）

「地域の歴史を語り継ぐ取り組み」

藤根自治振興会　会長　加　藤　健　悦　氏

「読書の楽しさを実感できる子どもたちにするために」

北上市立黒沢尻北小学校　教諭　齋　藤　由美子　氏

「市民と共に作り上げた！子供たちの職業体験事業！“鬼っジョブ～北上おしごとパーク”」

公益社団法人北上青年会議所　専務理事　平　野　太　基　氏

「きたかみ世界塾～地域解決プログラム～の取り組み」

岩手県立黒沢尻北高等学校　教諭　佐　藤　　亙　氏
及び同校１学年生徒

講評・閉会

主催　北上市、北上市教育委員会

共催　岩手県教育委員会

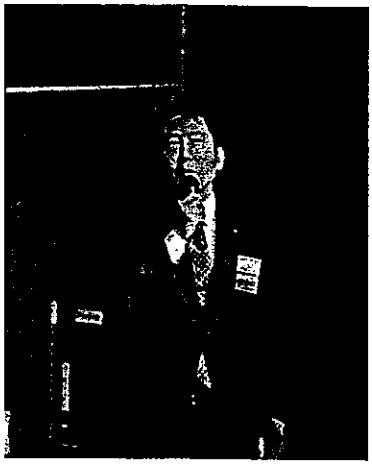
市民と共に作り上げた！子供たちの職業体験事業！“鬼っジョブ～北上おしごとパーク”

公益社団法人北上青年会議所　専務理事　平　野　太　基　氏

北上青年会議所では、「まちづくり」は「ひとづくり」からを合言葉とし、地域に根ざした運動を続けています。これまでも北上版てらこや「鬼っこてらこや事業」や「鬼ッズｅｎｊｏｙサークル・鬼ｊｏｙ」などの青少年育成事業を行ってきました。平成25年からは小学生の職業体験事業「鬼っジョブ～北上おしごとパーク」を開催しています。

鬼っジョブでは、子どもたちが仕事をすると、給料として通貨をもらうことができ、その通貨で買い物やゲームを体験することができます。仕事の楽しさや大変さ、やりがいなどを感じながら、社会の仕組みを学ぶことが出来ます。飲食店やコンビニ店員、保育士や消防士など様々な職業体験が用意されており、その運営には30社以上の地元企業や企画立案を担う市民、運営補助をするボランティアが関わっています。

ボランティアには高校生も多く参加しており、地域を支える人材の育成にもつながっています。また、市民や地域企業、行政などを巻き込みながら、市民が主体的に事業を運営していくことで、地域社会の発展・まちづくりにもつながっています。



子どもたちは職業体験を通して将来の夢を確かな目標にしています。また、青年会議所の皆さんや高校生ボランティアが活躍する姿を見て、自分の将来の姿を考えるなど、成長の道しるべになっています。

きたかみ世界塾～地域解決プログラム～の取り組み

岩手県立黒沢尻北高等学校　教諭　佐　藤　　亙　氏

生徒らが主体的に地域課題をとらえ、それを解決するためのアクションを考え、発信しながら、自ら学び・行動するグローバルな人材を育てることを目的とした地域課題解決プログラム「きたかみ世界塾」。総合的な学習の時間を活用した人材育成プロジェクトとして今年度から新たにスタートしました。

１学年の生徒は「商店街の活性化推進」「誰もが住みやすい町」「自転車の交通安全マナー」「ボランティア活動の活発化」「北上市の農産物活用法」などのテーマに沿った地域課題の解決に向けて、チームごとに研究・活動を行いました。夏休みには、実際に地域に出て行うフィールドワークを行い「自分たちが考えた課題は本当に地域の課題なのか」、「自分たちの考えた解決のためのアクションは役に立つのか」を検証するなど、学校の外でも学びを深めました。

生徒らは地域課題に向き合うことで、地域社会に対する関心を高め、地域貢献への意識を高めることができました。

高校生が地域社会の課題に挑戦し、解決策を考える地域課題解決プログラム「きたかみ世界塾」。
１学年の生徒239人が53グループに分かれ、それぞれが課題解決策を模索しました。

地域解決プログラム「きたかみ世界塾」の取り組みとして、黒沢尻北高等学校の生徒から自分たちで考えアクションを起こした事例の発表もありました。

テーマ　農産物　　チーム名　はる×3

地元の農産物があまり広く知られていないことを課題として、解決のためのアクションを考えました。

夏休みのフィールドワークでは、産直などに出かけ、地元の人たちは北上の農産物を知らない、あまり食べていないということを知りました。そこで、もっと地元の農産物を知ってもらうため、更木桑茶を使ったお菓子を考え、地域の文化祭でふるまいました。お茶ではく、お菓子としたことで子どもから大人まで親しんでもらえるようにしました。

地元の農産物を広めることで地域の活気につなげるアクションです。

テーマ　展勝地　　チーム名　ぷっきーず

桜が咲く春には観光客でにぎわう展勝地も、ほかの季節には賑わいが少なくなることを課題とし、解決のためのアクションを考えました。

冬にも展勝地に足を向け、展勝地の魅力を知るきっかけを作るため、桜並木のライトアップを企画しました。チーム以外の生徒にも声を掛け、約80名の仲間と実現した「展勝地キャンドル&ライトアップ企画」。約千個のペットボトルキャンドルと懐中電灯を使い、冬の展勝地を美しく演出しました。

幅広い世代に足を運んでもらい、展勝地の魅力を発信することが出来るアクションです。

テーマ　復　興　　チーム名　ＫＭＪ

震災復興のためには、沿岸部も内陸部も一緒に取り組んでいく必要があるのに、沿岸部と内陸部の人の意識には差があることを課題として解決のためのアクションを考えました。

内陸部の人にも、沿岸部の現状を知ってもらうため、自分たちが出来る広報活動をし、沿岸部でのボランティア活動の参加者を募りました。また、実際に釜石の仮設住宅を訪問し、奉仕作業などのボランティアを行いました。復興にはまだまだ時間がかかると言われていますが、高校生が主体的に被災者と関わり、沿岸部と内陸部のつながりを深めながら復興を推し進めていくアクションです。

発行　/　北上市まちづくり部生涯学習文化課　TEL72-8303